

主の昇天 2017.5.28

イエス、弟子たちをすべての民に派遣する

マタイ 28章 16-20節

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

説教

イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」マタイ 28:10

きょうのテキストの少し前になりますが、復活したイエスがマグダラのマリヤに告げたこの言葉を信じて、弟子たちはガリラヤに行き、山へ登りました。

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。弟子たちは山へ迷うことなく登ります。イエスの指示と福音書は記しますが、ガリラヤに行けというだけで山とは書いてありません。不思議なことです。ひょっとしたら、福音書には記録されていないけれど地上のイエス（復活のイエスとあえてわけてみました）は前もって弟子たちに指示してのでしょうか。彼らは山に行き、そこで復活されたイエスと出会い、伏し拝みます。さて、私たちは、どこでイエスに出会い、伏し拝むのでしょうか。会堂でしょうか。それとも自宅に設けた十字架の前でしょうか。みなさんがそれぞれにイエスと出会い伏し拝む場所があるとおもいます。わたしの考えではイエスとは、いつでもどこでも出会えます。私たちは、イエスを意識し、心を静かに祈るときイエスと出会うことができます。イエスを見て伏し拝んだ弟子たちの姿に私たちの姿を重ねることはできます。

だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。 マタイ 28:19-20

このマタイ福音書の最後の箇所を「大宣教命令」と呼ぶ人たちもいます。このイエスの命令は私たち一人ひとりに与えられました。私たちは、それぞれの場でイエスと出会い、祈り、そして、福音宣教に出かけて行きます。ひとつの見方ですが、礼拝の最後におこなわれる派遣の祝福は、私たち一人ひとりを宣教へと派遣するため、祈りとみことば、そして、パンとワインを通していただいた恵みを糧として派遣される、という考え方です。

あるとき、教会員（クリスチャン）の人が一番好きな聖書箇所としてこのマタイ福音書の最後のところ（大宣教命令）だといっていました。それを聴いていたわたしは強い違和感、はっきりいえば嫌悪感をもちました。

世界のキリスト教はいきずまりを打破するために宣教をプロの手からアマチュアにまかせる作戦を立てました。司祭や牧師が宣教するやり方（プロがやる伝道）はだめだったという反省から生まれた戦略です。福音派とか福音主義という名前で広まっています。しかし、そのやり方は洗練というか熟慮されたものではなく、従来はプロがプロの手口でやっていた事をアマチュアが真似をするという戦術がめだつばかりでした。「さあ、これから駅にいてピラをまこう」という掛け声の景気づけにマタイ 28 章のさいごの箇所を引用しているなあと感じたので違和感、嫌悪感をもちました。

イエスはユダヤ人としてユダヤ社会の中で育ち、暮らし、福音を宣べ伝える活動をおこないました。そして福音を語ったという理由で十字架につけられ死んで三日ののちに復活し、天に昇られました。これらの出来事をイエスは神の御子、メシア＝キリストだという解釈をすることでキリスト教という宗派が生まれ世界中に宣教され現在にいたっています。イエスのことばを福音としてとらえて、キリスト教の解釈にとらわれずに、ただ福音が一人ひとり

のこころに届き響き渡ればいいなあと、ペンテコステの今日、こころから願
います。
